



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	プラハにおけるユダヤ人学生協会バル・コホバの初期活動機関新聞『自衛 (Selbstwehr)』の創刊まで (1899-1907年)
Author(s)	中村, 寿; Nakamura, Hisashi
Citation	独語独文学研究年報, 36, 80-101
Issue Date	2010-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42883">https://hdl.handle.net/2115/42883</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	NJGS36_005.pdf



## プラハにおけるユダヤ人学生協会バル・コホバの初期活動 機関新聞『自衛(Selbstwehr)』の創刊まで (1899—1907年)

中村 寿

### 0. はじめに

本稿の目的は第一にオーストリア帝国ボヘミアにおいて日常言語統計の実施された1880年代から1900年代までのプラハにおけるユダヤ人学生によるシオニスト団体の系譜を再構成することにある。シオニスト団体のなかでも、とりわけユダヤ人学生協会バル・コホバ (Bar Kochba)の活動に重点を置く。なぜなら、シオニズムは一般的に政治運動として知られているものの、第一次世界大戦期に至るまでのバル・コホバは、シオニズムのうちに政治運動としての存在理由だけではなく、むしろ文化復興運動としての側面を読み込んでいた、きわめて独自色の強い学生団体であったからである。その機関新聞『自衛(Selbstwehr)』はプラハのユダヤ人に“ユダヤ的ユダヤ人(die jüdischen Juden)”、つまりシオニストとしての規範像を一貫して提示していた。シオニズムに関する『自衛』の言説がカフカに影響を及ぼしていることは論じられている<sup>1</sup>が、初期のシオニズム一般に関する論説、プラハのバル・コホバに関する日本語の文献はきわめて限定されているのが現状である。

そこで本稿は記述の対象を、バル・コホバの初期活動として1907年3月における『自衛』の創刊までとし、日常言語統計そして言語令をきっかけに激化するドイツ系住民とチェコ系住民の間で、ユダヤ人の新たなアイデンティティの根拠とされた初期のシオニズムをまず採り上げる。次にウィーン政治シオニズムと、東欧に由来する文化シオニズムの潮流との相違を、主にそれぞれの代表者テオドール・ヘルツル (Theodor Herzl 1860 - 1904)とマルティン・ブーバー (Martin Buber 1878 - 1965)の見解に沿って整理したうえで、文化シオニズムがバル・コホバの綱領としてプラハに定着するまでの経緯の記述を目指した。そして最後に『自衛』の創刊号に掲載された巻頭論説を中心に、プラハのユダヤ人学生にとってシオニズムは政治運動であったが、彼らにとってそれはユダヤ民族に独自なもの追求をも意味していたことを確認した。

### 1. プラハにおけるユダヤ人学生協会の沿革

プラハにおけるユダヤ人学生協会の沿革は、この地においてユダヤ人の解放が実現した1848年に遡る。<sup>2</sup> この年、既存の民族横断的な学生友愛団体に再編が起こり、ユ

<sup>1</sup> Binder, Hartmut: Franz Kafka and the Weekly Paper “Selbstwehr”. In: Leo Baeck Institute Yearbook. New York (Leo Baeck Institute) S. 134-148.

<sup>2</sup> ドイツ語圏プラハにおいて活動した学生シオニスト団体の系譜を再構成するに当たって参考にした欧語文献は, Kieval, Hillel J.: The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia. 1870-1918. New York (Oxford University Press) 1988, Spector, Scott: Prager Territories.

ダヤ人学生を中心とするドイツ系学生のための協会として、「プラハにおけるドイツ人学生朗読ホール(Lese- und Redehalle der deutschen Studenten in Prag)」が結成された。主に裕福なユダヤ人学生を中心に構成されたドイツ人学生朗読ホールは、プラハにおけるドイツ高尚文化の相続人<sup>3</sup>を自称し、一貫してドイツ・リベラリズムを支持した。そしてこのドイツ人学生朗読ホールのリベラル方針に反対する学生が民族主義団体を結成し、世紀末にかけてドイツ人学生朗読ホールから分離していく。1892年にプラハのドイツ系学生がアーリア人による民族主義学生結社「ゲルマニア(Germania)」を結成すると、ユダヤ人学生の間でもリベラリズムとは袂を分かち民族主義団体の設立が模索された。

ゲルマニアの分離によってドイツ人学生朗読ホールは会員の大多数をユダヤ人学生が占めるユダヤ人学生団体となったが、ドイツ・リベラリズムを思想的背景として、オーストリア文化の積極的受容に努めるという従来からの方針に変更は加えられなかった。しかしゲルマニアの結成は、ドイツ人学生朗読ホールに“民族籍(Nationalität)”によるドイツ系学生とユダヤ人学生の区別を持ち込むこととなり、翌年の1893年、ドイツ人学生朗読ホールに所属する数名の学生はゲルマニアに対抗してユダヤ人による学生結社「マカベア(Maccabäa)」を結成した。<sup>4</sup> マカベアは1890年頃のプラハのユダヤ人団体にとって支配的傾向であったオーストリアへの同化に反対することでドイツ人学生朗読ホールとの差異を明確にし、ユダヤ人学生に向かって民族としての覚醒を呼びかけた。

マカベアの指導者としてドイツ・リベラリズムからの離反とユダヤ民族主義の必要性を主張した人物が、ロシア出身の留学生としてプラハで学んでいたイスラエル・アロノヴィッチュ (Israel Aronowitsch 1882 - 1946)である。<sup>5</sup> このロシア人留学生の主導による学生結社マカベアは、オーストリアでもチェコでもない第三の道としてのユダヤ民族主義を主張したが、その主張と結社の存在は、プラハのユダヤ人学生には浸透しなかった。マカベアは三年後の1896年に、その名称を「ユダヤ人学生協会(Verein der jüdischen Hochschüler)」へと変更し、その民族主義的傾向に修正を加えている。マカベアの再編によって、プラハのユダヤ人学生団体は排他的な学生結社から再び緩やかな学生団体へとその方針を戻したのであった。加えて、学生団体であったという点において、ユダヤ人学生協会は、ユダヤ人の生活環境の改善という実践的な目標を追求する目的で設置されていた職業組合的な各種のユダヤ人団体とは一線を画していたという。<sup>6</sup>

しかし、ユダヤ人学生協会もまた、学生からの支持を集めることができず、1899年には構成員を3名にまで減らしてしまう。その原因にはドイツ・リベラリズムを暗黙

---

National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle. California (University of California Press) 2000, Bruce, Iris: Kafka and Cultural Zionism. Dates in Palestine. Wisconsin (The University of Wisconsin Press) 2007. である。但し、バル・コホバに関する歴史的記述については Spector (2000), Bruce (2007)とも, Kieval (1988) に依拠している。本稿における記述も特に注記がない限り Kieval に倣っている。

<sup>3</sup> Spector, Scott: Prager Territories. National Conflict and Cultural Innovation in Franz Kafka's Fin de Siècle. (=以下 SP), California (University of California Press) 2000. S. 17.

<sup>4</sup> Kieval, Hillel J.: The Making of Czech Jewry. National Conflict and Jewish Society in Bohemia. 1870-1918. (=以下 KV), New York (Oxford University Press) 2000. S. 93f.

<sup>5</sup> KV: S. 94.

<sup>6</sup> KV: S. 95.

の諒解とするユダヤ人学生にとって、ユダヤ民族主義の必要性が理解されにくかったことが挙げられよう。それでもウィーンのアシオニズムがボヘミアの地方を經由してプラハに波及してきた時局に沿って、ユダヤ人学生協会は学生団体として存続することができた。1899年の年末、ユダヤ人学生協会は地方出身のユダヤ人学生と合流し、当時プラハ教区のラビを務めていたナタン・グリュンの息子であるザモ・グリュン (Samo Grün)の参加をえて「プラハにおけるユダヤ人学生協会バル・コホバ (Bar Kochba, Verein der jüdischen Hochschüler in Prag)」を名乗った。<sup>7</sup> バル・コホバはこの後にも分裂と統合を経験するが、これがプラハにおけるアシオニズムの弁論機関として知られるバル・コホバの始まりである。

マカベアからバル・コホバの設立に至るまでの過渡期といえる1897年、ウィーンを拠点として活動していたヘルツルは、スイスのバーゼルにおいて第一回アシオニスト会議を開催し、アシオニズムの普及に取り組んでいた。その過程においてヘルツルはオーストリア帝国のなかでもユダヤ人人口が比較的多く、加えてドイツ語とチェコ語の対立によって民族問題の所在が見えやすくなっているボヘミア地域の特殊な事情に着目した。彼はボヘミアのユダヤ人を念頭に置き、ドイツ語圏のユダヤ人に向けてアシオニズムへの転向を呼びかけたが、そのときの呼びかけが、有名な『ボヘミアにおけるユダヤ人狩り (Die Jagd in Böhmen)』である。次節においては、この小冊子を引用しながらドイツ語圏ボヘミアのユダヤ人をめぐる特殊な事情について考察を加えたい。

## 2. ボヘミアにおけるユダヤ人狩り

1897年4月、オーストリア帝国の首相であったカジミエシュ・バデーニ (Kazimierz Badeni)は、ボヘミアが伝統的に二言語併存地域であったことと、チェコ語の公用語化を求めるチェコ人の主張に配慮し、「言語令 (Sprachverordnungen)」を発効させた。その内容は、ボヘミア地域の帝国官吏にはドイツ語に加えてチェコ語の能力証明を求めるというものであったが、この言語令は、ドイツ系住民が多数派を占めていたドイツ帝国との国境地域では特に激しい抵抗運動に遭遇した。結果的に七ヶ月後の11月28日、皇帝フランツ・ヨーゼフ自らがバデーニを罷免することで言語令は撤回されている。しかしバデーニの言語令は民族対立の火に油を注ぐ結果となり、言語令の発効直後にはドイツ系住民から、撤回後にはチェコ系住民からそれぞれの抵抗運動を誘発することになった。そして、そのドイツ系住民とチェコ系住民の対立の矛先は、最終的にはユダヤ人に向けられたのである。

1880年に導入された“日常言語 (Umgangssprache)”として使用する言語にもとづく民族籍の区分は、上述したように、学生結社ゲルマニアとマカベアの成立に見られるような、民族横断型の組織に分裂をもたらしていた。日常言語による民族籍の分類によってチェコ系住民はチェコ語の能力証明を彼らの民族的帰属の根拠と見なしたわけであるが、彼らはユダヤ人のチェコ語能力を民族的帰属の判定基準とは見なさなかったのである。ユダヤ人の民族的帰属はその宗教の独自性にあり、たとえユダヤ人がチェコ語

---

<sup>7</sup> KV. S. 96f.

に堪能であったとしても、彼らがユダヤ教を維持している限り、同じ範疇には属さないと考えられていた。つまりユダヤ人はチェコ語を話しても、改宗しない限りチェコ系住民とは見なされなかったのである。日常言語をドイツ語とするユダヤ人にとっても、事情は同じであった。最終的に、言語令に反対したドイツ系住民による暴動はドイツ系組織からのユダヤ人の排除に結びつき、言語令の撤回に反対するチェコ系住民による暴動は、ドイツ系住民に対する暴動からユダヤ人住民に対する暴動へと転化した。言語令をめぐるボヘミアの混乱は、国内外のユダヤ人にとって彼らの孤立を一層意識させる役割を果たしたのである。

1848年のフランクフルト国民議会において、ボヘミア地域の国境線が確定されると、ドイツと国境を接する周縁部にはドイツ系住民が多数居住し、内陸部にはプラハを中心としたドイツ系住民による言語島が点在するという状況ができあがった。ドイツ系住民が多数を占め、工業化が進んでいた北、西ボヘミアにおいては、「プラハから離れる(*Los von Prag*)」運動が展開され、ドイツ帝国への接近が試みられた。内陸部では1880年以降、日常言語にもとづく民族籍区分の統計が実施されると、ドイツ語地域とチェコ語地域の分断が進み、事態はそれだけに留まらず、内陸部に残されたドイツ語の言語島が次々に失われていった。ドイツ語の言語島の浸食は言語境界線の書き換えを意味し、このことは民族混住地域としてのボヘミアという伝統的な地理概念を覆した。従来の“民族横断的(*supraethnic*)”ボヘミアという地理観はドイツ・リベラリズムがかろうじて生き残っていたプラハでしか理解されなくなり、プラハと地方の差異はいつそう際立たされた。<sup>8</sup> 同時に、言語境界線の書き換えは領土の書き換えとも同一視され、言語は政治力の境界線を書きこむ力を有するものであると考えられた。それゆえに日常言語統計による土地損失の感情は、ドイツ系住民に深刻な土地損失の危機感を与えたのである。特にドイツ系住民を自認するプラハのユダヤ人には言語島プラハにおけるドイツ的根拠の正統性を主張する役割が期待されるようになり、彼らの言動からはドイツ、オーストリアへの過剰な同化が目立つようになる。ヘルツルは、このようなボヘミアの状況をドイツの駅通馬車とチェコの駅通馬車の比喩を使って描き出し、それぞれの馬車が隘路で出会い、進路を塞ぎ合った場合に遭遇するユダヤ人の運命を次のように語った。

ボヘミアにおけるこれらの抗争する二つの民族集団は、奇妙なことに、昔の駅通馬車の御者物語に新たな別形を見出したのだ。この逸話は、二台の駅通馬車が狭い道の上で出会う話である。どちらの馬車も道を譲ろうとはしない。馬車の客席にはこちらにもあちらにもユダヤ人がひとり座っている。そこでそれぞれの御者が、相手の馬車に乗っている客に向かってピシッと鞭を振って叫ぶ。「お前が俺のほうのユダヤ人を殴れば、俺がお前のほうのユダヤ人を殴るぞ。」ところがボヘミアではさらにこう付け加えられるのだ。「そして俺も俺のほうの奴を殴ってやる。」だからボヘミアのユダヤ人たちは、一度の旅で二度の鞭を頂戴するのである。<sup>9</sup>

この小冊子を通じてのヘルツルの見解は、離散のネットワークを通じて仲介業に活路

<sup>8</sup> SP: 9-13, 70-75.

<sup>9</sup> テオドール・ヘルツル (佐藤康彦訳) : ユダヤ人国家. (法政大学出版局) 1991年. 119頁.

を見出してきたユダヤ人の伝統的な生活様式に配慮しながらも、過剰な同化という現状に寄せる批判である。ボヘミアのユダヤ人に関して彼は、「現今のボヘミアにおけるモーゼの信仰をもつ同胞たちは何者なのか」、「彼らはドイツ人なのか、それともユダヤ人なのか」<sup>10</sup> という問いを投げかけ、同化ユダヤ人のもつ民族観に再定義を促した。彼は結論として、ユダヤ人が自らを“ユダヤ教徒のドイツ人”であると自覚している現状を問題視し、ドイツ人にとってユダヤ人は“別の民族”であり、“ユダヤ教徒のドイツ人”という存在のあり方は存在しえないことを再認識するべきだとユダヤ人に向けて呼びかけた。加えて、ドイツ語の言語島が浸食されつつある現状においてドイツ性を擁護することはユダヤ人にとって状況判断の誤りに他ならない。つまり、いずれドイツとチェコの民族問題が解決した後に、ユダヤ人には再び疎外される可能性が残される。<sup>11</sup> ボヘミアの民族問題に関するヘルツルの見解は、シオニズムは各国の内政干渉は行わないという原則にもとづいた、中立を保つという内容であった。

我々シオニストにとっては、この問題は解答と同様に単純である。我々はすべての民族性の、したがってまたドイツ民族性の阻害されぬ自然な発展に賛成するのだ。我々が反対するのは、生命力にあふれたそれぞれの民族を、したがってまたチェコ民族を圧迫し、貶めることだ。しかしこの争いのなかに存在するのは、明らかに、ただ関係者にいくらか関わりがあるに過ぎない境界紛争なのである。正義はいつどこにあるか。もちろん中間にある。問題はあるときはこちらへ引き寄せられるかと思うと、あるときは向こうへ引き戻される。したがって争いの当事者は交互に不正の立場になる。事態は我々にとって客観的にそのように見えるのだ。この争いのなかで我々自身の苦痛を前面へ押し出そうと欲するようなことは、我々是不適当だと判断した。そして、いずれにしても、ドイツ人たちが苦境に置かれている間に、ドイツに同化した者からチェコに同化する者へ変身するようなユダヤ人があれば、我々は彼らを断罪するだろう。<sup>12</sup>

ユダヤ人はドイツとチェコの民族問題に巻き込まれるべきではないし、ましてや民族問題の犠牲者になるべきではないというこの主張は、ユダヤ人にとって現実問題に即した対応であると見なされ、支持を集めた。1899年に発生したユダヤ人による儀式殺人の疑いを吹聴するヒルスネル裁判は、彼らにとってチェコ系住民からも最終的に拒絶されたことを意味し、ドイツ系住民から排除されたことと、チェコ系住民からも拒絶されたという事実は、彼らにとって彼ら独自のあり方を模索しなければならない結果をもたらした。この状況において、シオニズムは世俗化の過程を通じて生まれた普遍倫理宗教としてのユダヤ教の定義に再考を促し、「二千年前に存在することを止め、現在では記憶の中に生き続けている」<sup>13</sup> だけの失われたユダヤ人の国民的地位を取り戻すことを主張した。そのなかでも、救世主による民族の集団的救済という民族宗教としての側面の再評価は、新たなユダヤ人のアイデンティティを模索する運動として理解され、ユダ

---

<sup>10</sup> 前掲書, 109 頁.

<sup>11</sup> 前掲書, 112-113 頁.

<sup>12</sup> 前掲書, 108-109 頁.

<sup>13</sup> ウォルター・ラカー (高坂誠訳) : ユダヤ人問題とシオニズムの歴史. (第三書館) 1987 年. 18 頁.

ヤ人の間に共振空間を作り出した。

ボヘミアにおいてシオニズムに共鳴したのは、地方在住のチェコ系ユダヤ人であった。そのなかでもフィリップ・レーベンハルト (Filip Lebenhardt) とカール・レツェク (Karl Rezek) の二人はウィーンに本部を置く世界シオニスト連盟<sup>14</sup> のボヘミア支部として、1899年に「ユダヤ民族協会ツィオン(Jüdischer Volksverein Zion)」を設立した。<sup>15</sup> 自営業者を中心に発足したこの民族協会は、ユダヤ系商店の不買運動によって苦況に立たされている<sup>16</sup> 商店に資金を提供するための貯蓄銀行設立を目標としていた。ツィオンは地方において徐々にシオニズムの支持者を増やし、ツィオンと関係していた若者が学生としてプラハに出てくると、プラハのユダヤ人学生協会はツィオンを通じてシオニズムとの接触を経験した。そして一時は存続が危惧されるほどであったユダヤ人学生協会は、地方出身の学生との合流によりその停滞状況を打開することができたのである。学生協会は、ツィオンとの接触とその影響のもと、リベラルを謳っていたその綱領に改訂を加え、民族主義路線を採択した。そして1899年の年末、民族主義路線の採択と同時に、ユダヤ人学生協会は「プラハにおけるユダヤ人学生協会バル・コホバ(Bar Kochba, Verein der jüdischen Hochschüler in Prag)」<sup>17</sup> へと改名したのである。

### 3. ユダヤ人学生協会バル・コホバとその方針

1899年に相次いで結成されたツィオンとバル・コホバはボヘミアにおける初期シオニスト団体の嚆矢として位置づけられる。ツィオンの初代議長をつとめたレーベンハルトと、バル・コホバの初代議長をつとめたアルフレート・レーヴィ (Alfred Löwy) は、チェコへの帰属意識が優勢であった地方を中心にシオニズムの普及活動を実践し、初期のシオニズムは地方から浸透していった。その理由としては、プラハにおいては未だ主流を占めていたリベラリズムに民族主義は抵触していたことが挙げられる。事実、プラハのユダヤ人学生の大半はドイツ人学生朗読ホールに所属していたが、バル・コホバに所属する学生は圧倒的に少数であった。また、アーリア人結社を自称するゲルマニアを構成する学生もそのほとんどがドイツ帝国との国境に近い北、西ボヘミアの出身であっ

<sup>14</sup> World Zionist Organization の訳語として、本稿においては「世界シオニスト連盟」を用いる。

<sup>15</sup> KV: 96.

<sup>16</sup> Stölzl, Christoph: Kafkas böses Böhmen. Zur Sozialgeschichte eines Prager Juden. München (Text u. Kritik) 1975. S. 61, S. 72-76.

<sup>17</sup> 1893年に結成された学生結社「マカベア」の名称の由来は、第二神殿時代、セレウコス朝の支配に反旗を翻し、マカバイ戦争を闘ってイスラエル王国の自治独立を達成したマカバイ族 (Makkabäer) の故事に倣ったことであると推測されよう。「プラハにおけるユダヤ人学生協会バル・コホバ」の名称も、マカベアの事情と同様に、紀元132年から135年にわたってローマ帝国の支配に抵抗して叛乱を指導した実在の人物バル・コホバに由来するが、レーベンハルトはバル・コホバの名称をこの故事から直接的に構想したわけではない。彼はチェコ語の劇作家ヤロスラフ・フルフリツキー (Jaroslav Vrchlický) による同名の戯曲からこの名称を借用したという。このことはチェコ系ユダヤ人とチェコ人の間にはすでにシオニズムについての相互理解が成立していたことを示唆する。また、書物の標題を学生協会の団体名として採用したということからは、政治の文学化という初期のシオニズムが抱えていた問題の所在を見て取ることができる。

た。<sup>18</sup> これらの事情を考慮すると、プラハと地方の間にはリベラリズムと民族主義にもとづく差異が確かに認められる。しかし、地方から浸透したシオニズムはプラハのユダヤ人学生との接触と合流とを経験しているため、地方のチェコ系ユダヤ人とプラハのドイツ系ユダヤ人の間には、接触がまったくなかったわけではない。それゆえに、プラハのユダヤ人はしばしば「ドイツ文化の牙城」と言われるが、これはプラハにおけるドイツ系ユダヤ人とチェコ系ユダヤ人との接触を考慮していないため、必ずしも実態を反映した表現ではないように思われる。

ツィオンがユダヤ人職人、自営業者による相互扶助団体であったのに対し、バル・コホバは学生が運営を担うという組織の都合上、構成員は周期的に交替するのが常であった。そのために団体としてのバル・コホバにとって、将来の展望を見据えた長期計画を立てることは困難をきわめ、その綱領は主導権を掌握した人物によってその都度変更されざるをえなかったという。<sup>19</sup> バル・コホバの活発な活動期間は、1899年の結成から第一次世界大戦の戦中戦後の混乱によってユダヤ人がパレスチナ移住を本格化させるまでの約20年間である<sup>20</sup> が、そのなかでも1901年から1914年までのバル・コホバの方針の推移は、アルフレート・レーヴィの後任として議長に就任したフーゴ・ベルクマン (Hugo Bergmann 1883 - 1975)に従って、三段階に区分される。<sup>21</sup> 第一期は1901年から1905年を指し、この期間が文化シオニズムへの最初の接近期間である。第二期は1905年から1910年頃を指し、この期間においては文化シオニズムを支持するベルクマンの方針に反対し、競合するドイツ、チェコの両民族主義に対してより闘争的態度を示す一派により、学生結社「バリッシア (Barissia)」が結成されている。この期間はバル・コホバとバリッシアの対立によるプラハ・シオニズムの分裂期間とも言われ、シオニズムの文化的傾向を重視した第一期に比較して、プラハ・シオニズムは政治シオニズムに接近した。そしてこの期間に含まれる1907年に『自衛 - 独立ユダヤ週間新聞 (Selbstwehr - Unabhängige Jüdische Wochenschrift)』がバリッシアの機関新聞として創刊された。1909年から1914年までが第三期に当たり、この期間に大きな影響を及ぼしたのがマルティン・ブーバーである。ブーバーは、1910年の1月、4月、12月の三回にわたってベルリンからプラハを訪問した。特に彼による二回目の演説はプラハのユダヤ人から熱狂的に歓迎された。<sup>22</sup> ブーバーの影響がとりわけ大きか

<sup>18</sup> KV: S. 93-98, SP: S. 136.

<sup>19</sup> KV: S. 99.

<sup>20</sup> Stözl: a. a. O., S. 101-104. オーストリアの敗戦による1918年から1920年の混乱期に、約4000人のユダヤ人がパレスチナ移住を果たした。パレスチナ移住に伴ってチェコスロヴァキア共和国を構成する少数民族としてのユダヤ人はその相対的割合を減らした。ユダヤ人の影響力低下を確認した共和国政府は共和国憲法においてついにユダヤ人の民族籍を保障した。民族籍の保障によって『自衛』に見られるような民族主義、シオニズムの目的は曖昧化され、これ以降ボヘミアにおけるユダヤ人の活動は第一次世界大戦以前に比べて後退した。

<sup>21</sup> KV: S. 99f.

<sup>22</sup> Bruce, Iris: Kafka and Cultural Zionism. Dates in Palestine. Wisconsin (The University of Wisconsin Press) 2007. S. 24-27. ブーバーによる一回目の演説は1910年1月20日に開催され、ブーバーは1910年当時バル・コホバの議長役にあったレオ・ヘルマンの仲介で壇上に上がったが、聴衆の注目を浴びたのはブーバーに先だって演説をしたフェーリクス・ザルテン (Felix Salten) であった。ザルテンは「ユダヤ教からの背教 (Der Abfall vom Judentum)」と題して同化の弊害を問

ったこの期間は、1900年代後半の政治的期間に対して、バル・コホバのネオ・ロマン主義的段階ともいわれる。この期間において1911年頃、ベルクマンの後継としてバル・コホバの議長をつとめていたレオ・ヘルマン (Leo Hermann)は、『自衛』の編集をバリツシアから分離して、その管理をバル・コホバの影響下に戻した。<sup>23</sup>

#### 4. シオニズムの西と東： 政治シオニズムと文化シオニズム

西欧社会に適応し、ある程度の成功を収めて教養市民を自称する西方ユダヤ人一般にとって、1880年代のロシア帝国で頻発したユダヤ人迫害事件以降、西側への出国を計画し、西側においてその存在を知られるようになった東欧ユダヤ人は、彼らの安定した社会に反ユダヤ主義の再来を予感させるような不安要因であると見なされた。未習熟労働者として大挙して西側に押し寄せてくる東欧ユダヤ人の存在は、西欧諸国の労働者との間に雇用の市場をめぐる軋轢を生み、経済問題がユダヤ人問題に飛び火する可能性があることは、彼らにとって十分予測されることであったからである。それゆえに、ユダヤ人問題の現代的解決を主張する目的で1896年に発表されたヘルツルの『ユダヤ人国家』はユダヤ民族による国民国家の建設を目標とする書物である一方で、大量の東欧ユダヤ移民を収容するための受け皿の必要性を構想する書物であるともいえる。

ヘルツルがユダヤ人国家を構想した時点で、すでに東欧ユダヤ人によるパレスチナ移住は開始されていた。1881年には南ロシアのハリコフにおいて農業移民によるパレスチナ入植団体「ビルー(Bilu)」が結成され、ビルーは小規模ではあるが、農業移民をパレスチナに派遣している。1884年にはシレジア上部の都市カトヴィッツにおいてビルーを改組し、集団入植を目的とする「ホヴェヴェ・ツィオン(Chowewe Zion)」が結成された。ホヴェヴェ・ツィオンは「土へ還る」という目標を掲げて柑橘栽培を中心とする農場経営を開始した。<sup>24</sup>

これらの活動は、個人による入植事業ではなく、開墾団体を組織して移住を開始した点で、シオニズムへの発展段階であると位置づけられる。しかし、土地改良や衛生化を通じた入植者の生活環境の改善は難航し、マラリアの蔓延もあってホヴェヴェ・ツィオンの入植事業は失敗であると見なされた。それへの反省からヘルツルは、集団入植を成功させるためにはより強固で、かつ指揮系統の整理された相互扶助組織と財源の必要性を痛感し、『ユダヤ人国家』において、移住を成功させるための組織として「ユダヤ会社」と「ユダヤ人協会」の必要性を説いた。<sup>25</sup> ただし彼は政治的問題としての東欧ユダヤ人の移民問題を除けば、東欧ユダヤ人の現状については無関心であった。そのために彼とホヴェヴェ・ツィオンを通じた東欧との関係は当初から疎遠であった。

---

題視したが、ブーバーはユダヤ教と外部との関係を一切語らず、専らユダヤ人集団の内部に限定し、彼らの精神性の回復にもとづく未来の可能性を語りかけた。このことは、ブーバーの文化シオニズムが当時の学生にとっても難解であったことを示唆する。

<sup>23</sup> KV: S. 126.

<sup>24</sup> ウォルター・ラカー: 前掲書, 111-123頁.

<sup>25</sup> テオドル・ヘルツル: 前掲書.

1891年から数回にわたって、入植地の実地調査の目的でホヴェヴェ・ツイオンからパレスチナに派遣された人物にアハド・ハーアーム (Ahad Ha'am 1856 - 1927)<sup>26</sup> がいる。彼は開拓農民の疲弊した生活状況から、パレスチナは大量移民の受け皿としては不適切であると見なした。彼は国民国家の建設によるユダヤ人問題の解決ではなく、それに先立って離散を民族的特徴として、むしろ離散を肯定的に評価することによって離散民族としての民族意識の確立を目指し、文化シオニズムの先駆となった。<sup>27</sup> 1897年7月に第一回シオニスト会議を開催して以来、オスマン帝国との領土交渉が難航し、自身の健康問題の悪化も相俟ってその指導力に蔭りが見え始めたヘルツルに代わり、ハーアームの主張する国民国家建設の前提としての離散の再評価はユダヤ人問題の解決への現状を踏まえた“現実的(realistisch)”路線として、東欧出身のシオニストを中心に支持を集めていく。ハーアームに続く現実路線を重視するシオニストはロシア帝国の事情を踏まえて、西側主導の大規模移住計画に不満を表明した。彼らの主張は以下の3点に集約される。<sup>28</sup>

1. シオニズムにおけるヘルツルの一人指導体制に反対
2. 国内問題に対するユダヤ人の内政不干渉の徹底に反対
3. ユダヤ人国家の言語問題

#### 4. 1. 政治シオニズムのヘルツル指導体制に対する反対

ヘルツルの指導体制に対する反対は、彼がヨーロッパ列強およびオスマン帝国とのパレスチナをめぐる領土交渉に没頭して、ユダヤ人に固有の文化の維持、再興運動を一貫して軽視した点に通じている。たとえば文化史家のカール・ショースキーは『ウィーン世紀末』においてヘルツルのシオニズムを「新しい政治の一種の総合芸術作品」<sup>29</sup> と評し、ヘルツルをウィーンにおけるリベラリズムの風潮に抵抗して封建的旧秩序の復権を目指した二人のオーストリア出身の大衆政治家ゲオルク・シェーネラーとカール・ルエーガーの延長線上に置いた。<sup>30</sup> シェーネラーは農民と職人を擁護することによって、工業化時代の都市における新産業階級形成への介入を画策し、ルエーガーはカトリックの復権によって貴族と大衆との連携を可能にしようとした。両者とも都市における市民階級の勃興を阻止しようとした点において共通していたのである。そして最終的に両者とも反ユダヤ主義に接近したが、その風潮に対する反動としてユダヤ人による大衆運動を組織したのがヘルツルであったとショースキーは結論づける。ショースキーの指摘は、この三人の政治家が未来に寄せる大衆の心理を操作する目的で共通して「古代」という

<sup>26</sup> ハーアームの実名はアシャー・ギンスベルク (Asher Ginsberg) という。アハド・ハーアームはヘブライ語で「民衆の中の一人」を意味するギンスベルクのペンネームである。

<sup>27</sup> ウォルター・ラカー: 前掲書, 118 頁, Bruce: a. a. O., S. 20-24.

<sup>28</sup> Ettinger, Shmuel: Herzl und Zionismus. In: Die Juden. Ein historisches Lesebuch. Hrsg. von Stemberger, Günter. München (C. H. Beck) 1990. S. 259-267.

<sup>29</sup> カール・E・ショースキー (安井琢磨訳): 世紀末ウィーン - 政治と文化 -。(岩波書店) 1983 年. 207 頁.

<sup>30</sup> ショースキー: 前掲書, 151-229 頁.

装置を用いていたという点にまで及び、彼らにとっての「古代」とは、シェーネラーの場合には多民族に対するゲルマン民族の優位性を主張するドイツ民族至上主義であり、ルエーガーの場合にはキリスト教社会主義に即したローマとの新たな結びつきである。そしてヘルツルにとっての古代はイスラエル王国を指した。古代の復活を手がかりとしてヨーロッパとユダヤ人を分離させようとするヘルツルのシオニズムはユダヤ教とは相容れないものであり、『ユダヤ人国家』がシェーネラーやルエーガーと共通する同時代の民族主義的言説を無批判に取り入れていることは疑うべくもない。また、戯曲作家を目指して挫折した過去からも彼の芸術家気質はよく知られている。彼は過度の自己偏愛的感情から自らをモーゼになぞらえ、出エジプトとして“ヨーロッパからのユダヤ人の分離”を説いた。<sup>31</sup>

ユダヤ人問題の政治的解決として国民国家の枠組みを適用しようとしたヘルツルの評価は、当時の帝国主義、植民地主義の言説を割り引いて考えなければならないとしても大衆組織運動として、後世においても同時代人のもとでも批判的に見られている。特に東欧ユダヤ人を啓蒙されなければならない、解決しなければならない問題と見なしたその一方的な見解は東欧のシオニストやブーバーらから厳しく批判され、1901年に開催された第五回シオニスト会議において、東欧のシオニストはヘルツルに反対する目的で分派を結成している。シオニズムにおける西と東の分裂に際して直接のきっかけとなったのはヘルツルの指導体制に対する批判であるが、シオニズムの方針に見られる具体的なヘルツル批判の根拠は2. と3. にある。

#### 4. 2. 国内での活動

2. のユダヤ人による内政への不干渉の徹底は、プラハのバル・コホバの活動にも抵触する問題であった。バル・コホバはオーストリア帝国議会にユダヤ人代表団を積極的に当選させ、オーストリア帝国を構成する他の諸民族と同様にユダヤ人に対して日常言語と信教にもとづく人口統計への反映だけではなく、「ユダヤ民族籍(jüdische Nationalität)」の承認を目指している。<sup>32</sup> とりわけバル・コホバは学生を中心に構成された団体であったという事情から、1881年以降ドイツ語とチェコ語に分割されていたプラハ大学と工科大学という二つの高等教育機関におけるユダヤ民族籍の学籍承認を求めてきた。また、下級学校においては、週二時間以内に制限されていた宗教教育の時間の拡大を主張している。<sup>33</sup> しかしヘルツル派のシオニストが採択したユダヤ人による国内問題への不干渉の履行はこれらの活動を停止に追い込む結果をもたらす。また、特に西欧において進行した同化の過程を踏襲せず、ユダヤ人の制限「定住区域(Pale of Settlement)」が定められ、居住区域や大学入学者選抜、徴兵率などにおいては一定の差別を受けていたものの、それらの差別とは引き換えにユダヤ人の民族籍と、ある程度の自治が承認されていたロシア帝国において、内政不干渉の徹底は、“ユダヤ教徒のロシ

<sup>31</sup> ショースキー：前掲書、207頁。

<sup>32</sup> KV: S. 102, Selbstwehr. Unabhängige Jüdische Wochenschrift. Nr. 1. Prag, den 1. März 1907. 1. Jahrgang. S. 3.

<sup>33</sup> KV: S. 119.

ア人”としてロシアへの統合を目指す離散の現状に対する取り組みの禁止を意味した。同時に、ポグロムという騒擾に晒されたロシアのユダヤ人の間でパレスチナ帰還は熱烈に支持を広げていた。ところが、国家建設の予定地をパレスチナ、シリアに限定せず、世俗国民国家の建設を優先課題と見なすヘルツルのシオニズムは、東欧ユダヤ系知識人の民族的救済についての見解に抵触するものであった。バル・コホバも1900年代後半の政治的期間においてさえ、内政不干渉の原則には一貫して反対の立場を取っている。

#### 4. 3. ボヘミアの言語問題に対するバル・コホバの見解

3. は、ユダヤ人国家が建設された場合の公用語をめぐる論争に端を発している。バル・コホバは結成当初からヘブライ語とイディッシュ語を擁護する方針を打ち出していたが、その背景には各民族にはそれぞれ固有の言語が存在するという文化シオニズムの影響が挙げられる。しかしこの節の目的は政治シオニズムと文化シオニズムの争点を整理するだけではなく、この対立を背景として中欧プラハにおけるシオニスト学生団体の位置づけを目指すことにある。そのため、ここでは特にドイツ語とチェコ語の言語論争というボヘミアの事情に注目しながら、バル・コホバの学生たちにとっての言語観を明らかにし、最終的にバル・コホバの基本的方針について考察したい。

ヘルツルは集団移住を通じたユダヤ人問題の政治的解決を最優先し、同化を通じて希薄になってしまったユダヤ教とユダヤ人各個人との関係を再構築する作業を国家建設後の問題であるとして後回しにしてしまったため、迅速なユダヤ人国家建設の実現可能性に懐疑的であったハーアームらシオニズムの現実派は、離散の現状においても実践可能な、民族の固有性の回復にもとづく自己解放を目指す取り組みこそ国家建設に先行する過程であるとして、ヘルツルを批判した。このようなハーアームの考えを西側に紹介する役割を担った人物が、同じくホヴェヴェ・ツィオンの運動に関与した過去をもつナータン・ビルンバウム (Nathan Birnbaum 1864 - 1937)である。<sup>34</sup> ビルンバウムは第一回シオニスト会議においてすでにハーアームの方針を擁護する演説を行い、1903年には、ハーアームの解説書を「ユダヤ・ルネサンス」という副題のもと、ドイツ語で出版した。プラハのシオニストはビルンバウムを経由し、自己解放を通じてのユダヤ人解放という東欧の論客の主張に触れたのである。このユダヤ・ルネサンスをバル・コホバの活動方針として採用した人物がフーゴ・ベルクマンであった。

ベルクマンはシオニストの環境に生まれただけではなく、民族教育の重要性とヘブライ語に通暁している人物であった。そのため彼は政治によるではなく、救世主によって実現される民族の集団的救済というユダヤ教の伝統にも明かかった。ベルクマンが兄のアルトゥールの後を追い、アルトゥール・レーヴィの後任としてバル・コホバの議長に就任するのは1903年頃のことであるが、彼は議長に就任するとすぐに、学生同盟の活動としては通例であった制服着用の街頭演説会や行進、競合団体との決闘やパーティの開催を禁止し、バル・コホバの活動の中心をヘブライ語とイディッシュ語の読書会や

---

<sup>34</sup> KV: S. 101.

ユダヤ人の歴史、シオニズム理論など、民族文化の啓発活動に充てた。<sup>35</sup> ベルクマンにとってのシオニズムは、政治問題としてユダヤ人問題の解決に取り組むだけではなく、東欧に由来する現実派の見解を引き継ぎ、民族の固有性を各個人の責任において再生させ、そのことを通じた民族の解放を意味していた。そのためバル・コホバの運動方向は、競合するドイツ、チェコの民族主義に向かってユダヤ民族主義の存在を主張する従来の外向きの運動から、プラハのユダヤ人集団に向かって、ユダヤ人各個人がユダヤ教と向かい合うことの必要性を説く、集団の内部に限定された内向きの運動へと、その運動の向きを転換されたのである。この方向性の転換は、一見各個人とユダヤ教との関係を刷新する個人本位にもとづく考えに由来するように見えるが、実際のベルクマンは各個人の取り組みがシオニズムの実現に直結すると考えていた。そのため、シオニズムの実現にはユダヤ人全員の自己犠牲が必要であるとする別形態の集団主義をもたらしてしまう結果となった。ベルクマンのシオニズムは闘争的な民族主義ではなかったにせよ、共同体の構成員に責任を強制するものであった。このようなベルクマンの方針の観察者であり批判者であったのがカフカである。<sup>36</sup> この、プラハのユダヤ人学生集団にとっての外部から内部への運動の向きを反転させる過程において、ベルクマンによって不可欠と見なされたのが民族固有の言語であるヘブライ語とイディッシュ語の存在であった。

バル・コホバによるヘブライ語の見直しについては、東欧の影響だけではなく、ボヘミア特有の事情がある。19世紀末にシオニズムがプラハに到達した当時、プラハのユダヤ教区はドイツ・リベラリズム擁護の原則に従い、オーストリア支持を明確にしていたが、他方で地方を中心に、チェコ語を採用してユダヤ教徒としてチェコの民族籍への帰属を模索するチェコへの同化運動も開始されていた。日常言語統計の導入は言語の差異を指標とする民族籍の分類をもたらしたが、言語の差異のみにもとづくユダヤ人への民族籍の割り当ては、彼らが信教を同じくしていない以上、ドイツ系住民にとっても、チェコ系住民にとっても受け容れがたい事態であったことはすでに述べた。そのためにドイツ系住民、チェコ系住民の両者によるユダヤ人の拒絶がボヘミアにおけるシオニズム受容の土台を準備したという言い方もできる。それだけでなく、プラハのユダヤ人が民族固有の言語としてヘブライ語に注目するようになるまでには、バル・コホバの支持した文化シオニズムとチェコ民族主義が共有していた各民族には固有の言語が存在するという民族ロマン主義の背景があった。

ハーアームは西側のシオニズムに異論を唱えているが、彼の反論は民族籍の区分に応じて領土を分割させ、ヨーロッパとユダヤ人の分離を主張する国民国家論を無批判に導入したヘルツルとその追随者であるマックス・ノルダウ、ダヴィット・ヴォルフスゾーンらに対する反論であり、ユダヤ人に向かってヨーロッパ文化の影響そのものの否定を説いたわけではない。チェコ民族主義は、シオニズムの議論を先行する民族主義のモデルと見なし、なかでもチェコ民族の指導者マサリク (Tomáš Masaryk 1850 - 1937) は、シオニズムの現状派に倣って自らをチェコ民族主義の現状派と名乗り、ハーアームと同様に、早急な民族の独立を主張する過激派とは一線を画した。<sup>37</sup> マサリクはオーストリア

<sup>35</sup> KV: 101f., SP: S. 139f.

<sup>36</sup> SP: S. 135-142.

<sup>37</sup> KV: S. 107-115.

への民族的同化に警鐘を鳴らし、各民族のもつ固有性の十分な発揮が諸民族の解放につながるというハーアームの説を援用し、チェコ民族の固有性の再生を目指したのである。つまり彼らチェコ人にとっての同化とは、チェコ人にとっても、ユダヤ人にとっても、その固有の伝統との結びつきを喪失してしまった事態を指し、民族のルネサンスは伝統との継続性を回復することによって実現されると考えられた。チェコ語がチェコ人にとって、彼らの伝統との継続性を回復する手段であると見なされたのに対し、ユダヤ人にとっては、ヘブライ語がそれに該当すると見なされた。つまり、バル・コホバの言語観はチェコ民族主義とも関係していた。

最後に、ボヘミアの言語問題に対するバル・コホバの反応について触れてみたい。日常統計による言語の差異は離散の歴史をもつユダヤ人にとって、民族の差異を決める指標にはなりえなかったのであるが、言語間の差異を民族間の差異として該当させようとするボヘミアの現状に直面して、彼らは民族と言語との関係の再定義に取り組んでいくこととなる。このユダヤ人にとっての言語をめぐる議論は、ヘブライ語の再評価だけではなく、これまでにユダヤ人の隠語や通商語として決して正式な地位を与えられることのなかったイディッシュ語に光をあてることになった。イディッシュ語の再評価は、固有の言語と東欧における土着の民としての東欧ユダヤ人の再評価をもたらし、固有の言語をもたないだけではなく、固有の土地さえもたない“根無し草(wurzellos)”としての西方ユダヤ人像という、ユダヤ教における「東」と「西」という見方を確立させた。

根源と集合的記憶、伝統との関連性をもたない西方ユダヤ人にとって、その内面において出自の歴史を再構成することは喫緊の課題であった。西方ユダヤ人はその課題を、ユダヤ人の民族文化の過去を新たなる生へと覚醒させることで解決しようとした。<sup>38</sup>

このことによって、従来は難民問題の対象としてしか見なされていなかった東欧ユダヤ人が文化の再生者として脚光を浴びることとなる。この「東」をめぐる言説の転換において大きな役割を果たしたのが、次節において述べるブーバーであった。<sup>39</sup> およそ1900年から1910年までの約十年間を通じて、ベルクマンを初めとし、プラハのユダヤ人はほぼ例外なく東欧への憧憬に駆り立てられていくが、本稿では東西の問題には立ち入らず、ボヘミアにおける言語問題に対するバル・コホバの現状認識に触れるだけにとどめたい。

バル・コホバは1. のヘルツルによる西側主導体制と、2. におけるユダヤ人の内政不干渉には反対しているにもかかわらず、3. と間接的に関わっているボヘミアにおける言語問題に関しては、『ボヘミアにおけるユダヤ人狩り』においてヘルツルが主張した通りの現実に即した中立の見解を表明している。彼らはヘブライ語を重視するとはいっても、ヘブライ語を公用語として採用すべきかという問いに対しては回答を保留し、

<sup>38</sup> Baioni, Giuliano: *Kafka - Literatur und Judentum. Aus dem Italienischen von Gertud Billen und Josef Billen.* Stuttgart (Metzler) 1994. S. 1f.

<sup>39</sup> Baioni: a. a. O., S. 13. バイオーニにおいても、ユダヤ教における「西」と「東」の対立図式を初めて持ち込み、カフカに「西方ユダヤ人の時代(westjüdische Zeit)」を強く意識させた人物としてブーバーの名前が挙げられている。

一貫してボヘミアにおける民族、言語問題には不干渉を説いていた。シオニズムをめぐる議論において、西欧と東欧の間で争点となった3つの点にボヘミア特有の事情を反映させ、初期バル・コホバの最大公約数的位置づけを試みているならば、バル・コホバはドイツ語圏にありながら東欧寄りであり、民族の文化、言語問題に関しては、オーストリア寄りでもチェコ寄りでもない中立を目指し、多民族国家オーストリア帝国の存続を前提とした上で、その枠組みにおいてチェコ地域における少数民族としてのユダヤ人の権利を主張する団体であったと位置づけられる。

## 5. 文化シオニズムとバル・コホバ

前節においてはヘルツルの主導する西側のシオニズムと、ハーアームの現状重視に由来する東欧のシオニズムの相違を3つの論点にもとづいて整理し、文化シオニズムの問題点と、ボヘミアの事情を踏まえてシオニズムの文化的問題に対するバル・コホバの見解を明らかにした。バル・コホバが離散という現状での活動を重視するに当たって、ベルクマンの方針が大きな影響を及ぼしていたことも述べた通りであるが、この節においては、ベルクマン同様に離散の現状で可能な活動にユダヤ人解放の可能性を見出した二人の人物、ベルトルト・ファイヴェル (Berthold Feiwel 1875 - 1937) とブーバーについて触れ、バル・コホバが最終的に現状重視の方向性を明確にするまでの過程をたどってみたい。

### 5. 1. 現状での課題

ファイヴェルはシオニズムを“革命(Zionist Revolution)”として認識し、革命遂行に必要な前提として、現状における文化、経済、政治的條件の改善を目指す「現状での課題(Gegenwartarbeit)」の必要性を提唱したことで知られる。<sup>40</sup> 彼は1901年3月に開催されたオーストリア・シオニスト会議において「現状での課題」を主張したが、彼の発言はヘルツルの呼びかけたユダヤ人の内政不干渉に抵触する活動と見なされたため、世界シオニスト機構は「現状での課題」の採択を拒否した。「現状での課題」の不採択は、パレスチナ移住を最優先する西側のシオニストと、東欧のユダヤ人居住区域における彼らの地位向上と社会統合を目指す東欧のシオニストとの間での対立を表面化させ、ファイヴェルはヘルツル周辺の幹部が主導権を握る体制に批判的な立場を取るヤーコプ・コーガン・ベルンシュタイン (Jakob Kogan-Bernstein)、レオ・モツキン (Leo Motzkin)、ハイム・ヴァイツマン (Chaim Weizmann)、ブーバーらと同年12月に開催された第5回シオニスト会議において「民主主義派(Demokratische Fraktion)」を結成した。<sup>41</sup> 民主主義派の共通認識は、国民国家の存在を前提とし、パレスチナ移住を通じたユダヤ人問題の政治的解決を目指したヘルツル主導の政治シオニズム (Political Zionism) に対し、まず第一に移住によるユダヤ人問題の即時的解決を疑問視する点にある。そして離散の現

<sup>40</sup> KV: S. 102, SP: S. 140, Bruce: a. a. O., S. 20ff.

<sup>41</sup> Ettinger: a. a. O., S. 263f.

状においてユダヤ人の連帯を説く彼らの主張は、ユダヤ人にとって固有の習俗文化を見直す方向に向かった。民族宗教としてのユダヤ教の見直しは、民族の解放には、各個人の内面におけるユダヤ教への信仰告白が外部に向けたユダヤ人の自己主張よりも先行するという、個人の解放を通じての民族の集団的解放に関する議論を展開させた。彼ら民主主義派の見解は「文化シオニズム(Cultural Zionism)」として、あるいは個人の内面を重視し、特にユダヤ人問題の解決を救世主による民族の集団的解放という宗教的伝統と不可分の関係に置いて認識した点で「霊的シオニズム(Spiritual Zionism)」とも呼ばれている。<sup>42</sup>

「現状での課題」は政治シオニズムによってその採択を拒否されたが、そのときファイヴェルと共にオーストリア・シオニスト会議に出席していたバル・コホバの議長アルフレート・レーヴィらは、「現状での課題」をバル・コホバの活動方針としてブラハに持ち帰った。当初、ファイヴェルによって東欧のユダヤ人居住区域における東欧ユダヤ人の生活環境の改良を目指す意味で使われていた「現状での課題」は、レーヴィに継いで議長に就任したフーゴ・ベルクマンによって、同化を通じた西方ユダヤ人の文化的貧困に取り組む事業としてその意味に修正が加えられ、バル・コホバの文化的方針の指針となった。

## 5. 2. 西方ユダヤ人によるシオニスト革命

民主主義派との連携というバル・コホバの方向をより決定的にしたのが、初期シオニズムにおいて東西の分裂論争を呼んだウガンダ危機への対応である。ウガンダ危機とは、国家建設を優先するために領土交渉が難航していたパレスチナの代替地として、一時的な「一夜の避難地(Nachtsyl)」としてでも土地の獲得を優先課題と見なし、国家建設の可能性を中央アフリカ高地のウガンダに求めたことに端を発する紛糾と混乱を指す。<sup>43</sup>

ヘルツルは国家の建設によるユダヤ人問題の解決には拘泥しても、建設予定地をどこに置くかという点については、言語問題と同様に回答に幅を持たせていた。『ユダヤ人国家』においてもパレスチナ案、他方で気候温暖で人口希薄であるからという理由でのアルゼンチン案が見られるように、ヘルツルは最終的なユダヤ人のパレスチナ帰還を前提としながらも、それが実現するまでの暫定的国家建設予定地としては複数の候補地が存在する可能性を認めていた。<sup>44</sup> 1903年、第6回シオニスト会議においてヘルツルにより提出されたウガンダ案は、従来からホヴェヴェ・ツィオンの主導で実施されてきた東欧ユダヤ人の開拓事業を水泡に帰せしめることを意味し、彼らに対しウガンダ入植を強いる結果となった。そのため先に述べた3つの理由からヘルツル主導の現体制に批判的であった民主主義派はウガンダ案を引き金に政治シオニズムとの分離を模索し、シオニズムは東西分裂の危機に陥った。ヘルツルは東西分裂の危機を憂慮しつつ1904年に没し、政治シオニズムの後継にはダヴィット・ヴォルフスゾーン (David Wolffsohn 1856 - 1914)が立った。バル・コホバはヴォルフスゾーンとも連携せず、その後190

<sup>42</sup> SP: S. 139.

<sup>43</sup> ラカー:前掲書, 181-194 頁, Ettinger: a. a. O., S. 265ff.

<sup>44</sup> ヘルツル: 前掲書, 30-34 頁.

9年にクルト・ブルーメンフェルト (Kurt Blumenfeld 1884 - 1963)がドイツ語圏におけるシオニズムの主導権を握るまで政治シオニズムとの連携を避けていた。

「現状での課題」を採択したバル・コホバは、ウガンダ危機を経てその文化路線をより確固たるものとした。その過程においてファイヴェルに並び、プラハのユダヤ人に向けて文化的貧困という西方ユダヤの現状に対処する取り組みの必要性を論じたもうひとりの人物がブーバーである。ブーバーは、西欧のユダヤ教の現状を律法に縛られて硬直してしまった状態に喩え、神秘体験を通じて日常の生を聖別した東欧のハシディズムをユダヤ教の復興運動として、西欧のそれに対置した。西方ユダヤ人は硬直してしまった現状で、もう一度ユダヤ教の復興運動を起こすことによって、ユダヤ教の未来を創造することができるのである。

バル・コホバとブーバーの最初の接続は1903年のことであった。1903年はバル・コホバの前身となった学生結社マカベアの結成から数えて10年の記念の年に当たる。バル・コホバはユダヤ人学生協会の設立から十周年を祝う「夕べ(Festabend)」の企画における講演者として、ファイヴェルとブーバーをプラハに招聘した。<sup>45</sup> この「夕べ」におけるブーバーの講演テキストは現存していないが、キーヴェルは同時期に執筆されたブーバーのエッセー『ルネサンスと運動(Renaissance und Bewegung)』を用いて、この講演を再構成している。ここでブーバーの語った内容を要約してみよう。彼はまず入口として、現状のユダヤ教における受動的態度を批判することから始めている。<sup>46</sup>

ユダヤ教の受動的態度は、19世紀中盤のユダヤ人解放以来、ユダヤ人から絶えずその固有性の放棄を要求し、その放棄と引き換えに解放を実現させてきた外部の要因に由来する。しかし、ユダヤ教の衰退は外部の要因によるのみではない。ユダヤ教そのものが形式的な律法の遵守をその第一目的と見なしてきたため、ユダヤ教は人間の生において無条件に肯定されるべき官能や悦びを見失ってしまったというユダヤ教の内部における事情もその衰退には影響しているという。つまり、現状のユダヤ教は戒律の実践としての形式に他ならず、ブーバーがその代わりにユダヤ教における本質の実現と見なしたのは、ユダヤ教が異端視してきた東欧のハスカラーとハシディズムであった。モーゼス・メンデルスゾーンの啓蒙主義にその起源をもつハスカラーは形式的な戒律の実践ではなく、自由な意志にもとづく意志決定の重要性を教えた。ハシディズムは神秘体験を通じたこの世の聖化を説くことによって、硬直したラビのユダヤ教を覆す潜在性を秘めた革命的思想となった。ブーバーにとっては、このハスカラーとハシディズムこそがユダヤ教の再生であり、解放によって他民族の文化を無批判に受容し、民族の固有性を放棄してしまった西欧において、ユダヤ教のルネサンスは起こりえない現象であるとされた。自らのガリツィア経験を踏まえ、東欧を知る西方ユダヤ人として、彼が同胞としての西方ユダヤ人に説いたのは、形式化してしまった現状のユダヤ教における革命の必要性であり、その革命を通じてユダヤ人自らが、ついに自分で自分の運命を切り拓くことのできる可能性であった。現状の、“解放— 後のユダヤ人(Post- emancipation Jews)”は、ハスカラーとハシディズムという過去におけるユダヤ教の復興運動を現在において

<sup>45</sup> KV: S. 103.

<sup>46</sup> KV: S. 103-106.

実現することによって、民族の未来を創造することができるのである。

ブーバーによる、自らの運命を決定することのできる“新しい”ユダヤ人は、それまで自らをユダヤ教にとっての末端、及び周縁と見なしてきた西方ユダヤ人に対し、西方ユダヤという現状こそがユダヤ教における革命としてのシオニズムの前提であることを示した。シオニズムの実現にとっては西方ユダヤ人各個人が主役であり、各個人レベルでの信仰告白の実践が民族の集団的解放に作用するというブーバーの精神主義は、プラハにおける「現状での課題」に民族と霊魂との関係の構築を目指す新しい運動をもたらした。

### 5. 3. 政治派バリッシアの分離と『自衛(Selbstwehr)』の創刊

ファイヴェルによる西方ユダヤの文化的貧困の現状を問題視する「現状での課題」と、ブーバーの語る“東欧”を経験したバル・コホバの学生たちにとって、東欧は西欧における同化以前の、民族にとっての正統な伝統が現存する土地であると位置づけられた。ベルクマンは1903年、当時はオーストリア領のガリツィア旅行に出発し、ガリツィアではチョルトコフ (Czortkow)のレッベの法廷に滞在しながら東欧のシオニストとの交流を深めた。<sup>47</sup> プラハ帰還後のベルクマンは東欧文化の啓発活動を重視し、バル・コホバの「現状での課題」は、ブーバーとベルクマンの仲介によって政治活動から文化擁護、民族教育の実践へと転化されている。バル・コホバの幹部にはヘブライ語と離散の歴史についての知識が奨励され、バル・コホバは東欧の文化を紹介する「タベ」を積極的に開催し、東欧での現地調査を希望する学生向けに基金を創設した。

1903年から1905年にかけてのバル・コホバは、ブーバーの主張したような自己改革を通じたユダヤ人問題の解決を第一目的にしていたのであるが、必ずしもプラハの学生はそのような“文化的”方針に賛成していたわけではない。先に述べたように、ユダヤ教の革命を通じての自己解放という考え方では、バル・コホバの活動対象をユダヤ人集団の内部に限定してしまう結果となる。そのため「タベ」に代表される文化の啓発活動は、ユダヤ民族主義団体としてのバル・コホバの存在を他の民族主義団体との競合関係において埋没させてしまうのではないかという危惧を抱かせた。この背景には政治シオニズムと文化シオニズムによる民族の解放についての見解の相違がある。そこで、競合する民族主義団体に対しシオニズムを声高に主張できる政治的手段が必要であると考えた学生は、制服着用の学生結社「バリッシア」を結成してバル・コホバから分離した。<sup>48</sup>

バル・コホバとバリッシアの性格について簡単にまとめてみると、両者とも同化という西方ユダヤの「現状での課題」に取り組むという出発点においては共通している。ところがバル・コホバの活動は離散という民族的特徴の再検討につながる文化運動として位置づけられるのに対し、バリッシアにとっての「現状での課題」は東欧ユダヤ人の生活環境の改善、難民問題の解決、オーストリア帝国内でのユダヤ民族籍の認可にもとづ

<sup>47</sup> KV: S. 115f.

<sup>48</sup> KV: S. 116. バリッシアを結成した代表的人物として、Leon Stancel, Stanislas Stancel, Robert Neubauer, Hugo Löw, Leo Kornfeld の名前が挙げられている。

くイディッシュ語の公用語化などを指す。バリッシアはオーストリア帝国を構成するその他の民族との勢力均等を目指した政治団体としての傾向が強い。バル・コホバがプラハのユダヤ人集団の内部に限定して新たなるアイデンティティの構築によるユダヤ人問題の解決を主張しているのに対し、バリッシアは競合する民族主義団体の形式をむしろ積極的に採用し、ユダヤ人集団の外部に向けてその存在意義を強調しようとしている。方向性をめぐるその差異から、バル・コホバの“内向的”な姿勢とバリッシアの“外向的”なそれとはしばしば比較の対象となっている。<sup>49</sup>

1907年、リヒャルト・ブランダイス (Richard Brandeis) と、プラハ日報 (Prager Tagblatt) の編集者をつとめていた F. シュタイナー (F. Steiner) により、バリッシアの機関新聞として『自衛(Selbstwehr)』が創刊された。<sup>50</sup> 1907年3月1日、編集住所はプラハ、ポジチュ (Poříč) 7番地付で始まる創刊号の巻頭論説は、学生結社らしく闘争的な表現を用い、ユダヤ人に向けた「自衛! (Selbstwehr!)」の呼びかけでこのように始められている。

#### 自衛!

この誇るべき誌名、単なる誌名以上のもの。抗議と綱領。ユダヤ教におけるありとあらゆる脆さと中途半端さ、腐敗に対する抗議と宣戦布告、そしてユダヤ民族の若き、自負心に満ちた萌芽力と努力の強力かつ断固とした肯定。臆病と自ら働きかけずにただ待つだけの時間、ユダヤ人の特徴を陰に隠し、不安のうちに身を潜めるだけの時間は過ぎ去った。今を限りに訣別しよう。硬直と弛みの状態から揺り起こされたユダヤ民族は覚醒し、世界中のあらゆる場所で新たなる生と向き合い、それに向かっている。

生の活力という第一の、そして最大限に信頼できる標識は、各個人においても、民族全体においても自由と自立を求める努力であり、他者の善意や同情に縋り、それらを当てにするのではなく、自らの足で立ち、自らを貫き通し、その個性を存分に発揮しようとする意志である。自助努力、自己保護、自衛。これは誠実な人間全員にとって、そして自己を尊重する国民全員にとって最上位の、第一の原則である。これは以前から近代のユダヤ人にとっての叫びであり、標語でもあった。今やそれはわれわれにとっての標語でもある。

最近数十年間の歴史がわれわれユダヤ人に目も眩むほどの明白さをもって示し、日々新たに証明していることがある。ユダヤ人が外側にある何らかの権力あるいは党派から — それらが進歩的であれ、リベラルであれ、社会主義的であれ、どのようなものであるとしても — 癒しと援助を期待し、自己を最大限に卑下して、それ自体は確かに高貴で、正当ともいえるこのような努力への奉仕と戦いにおいて、ユダヤ人自身の精神的、物質的な力を使い果たしてしまうならば、それは、屈辱的であるだけでなく、あさはかでもあり、誤っている、ということである。われわれには自力での自助と自衛が必要であり、われわれは団結し、誇り高くそして自由にわれわれの民族への所属を宣言し、確認することが必要である。そうして初めて、われわれは敵の敬意と尊敬を、また、われわれに好意的で真に自由な人々や諸民族の援助や評価を少なくともも要求することができるのである。自意識と意志力、目標を意識したユダヤ人としてのみ、われわれは真の友

<sup>49</sup> KV: S. 116, SP: S. 140.

<sup>50</sup> Binder, Hartmut: a. a. O., S. 135.

を見出すことができ、そしてわれわれ自身を尊重し、われわれ自身をいたわり、統一へと団結することができるようになってようやく、ユダヤ人問題への真摯な、完全かつ最終的な解決のための前提条件が満たされるのである。

われわれのこの新聞は、この前提条件を読者と共に整えようとするものであり、教条的に硬直して一面的にならざるをえない危険を常にはらむ何らかの党派的立場にもとづくものでは決してなく、独立した、先入観にはとらわれない、中道の明確な目標を追うものである。特に、ユダヤ教の維持を衷心から望むが、われわれにとって必要なことがらについての正しい認識や分別をもたないユダヤ人に対しては、われわれは彼らの愚痴にも、無数の訴えにも耳を貸すことはないであろう。われわれは近代の、国家社会的な世界観に基づき、ありとあらゆる卑小な論争と、党派間の個人的な論争を忌避し、ユダヤ共同体の内部の強化、結束、団結にとって必要であり、それに役立てられうることすべてに支持を表明する。それゆえに、—これが声高に主張されなければならないことであるが—われわれの共感、あらゆる若きユダヤのルネサンス運動への努力に向けられており、それゆえにわれわれは、客観性と独立性を最大限に堅持した上で、生を養う将来性豊かな、高貴な運動のひとつとしてのシオニズムに無条件の親愛を寄せて関与する。しかしこれは、シオニズムの理想の実現性と必要性を懐疑する人々をわれわれのもとから排除するということを意味しようとするのではない。

内面の強化と統合のための闘争において、われわれはとりわけ旧来の、前近代的で腐敗したユダヤ人共同体制度の根本的変革を支持する。ユダヤ人共同体の生を公的に規制し、代表する場である、このユダヤ教における内面の誓はこれ以上民族と疎遠であってはならない。またここにおいて、民主的原則が実現されねばならない。あらゆるユダヤ人には、内面の共同体制度に関与する利益と権利が与えられている。しかし民族全員がやみくもに各個人を当てにしているような、墮落した習慣は撤廃しなければならない。ユダヤ人共同体制度においても、新しい、社会政治的精神が共同体内部を満たすためには、可能な限り迅速に、近代的かつ公正な選挙制度を導入すべきであり、そうしてのみ宗教共同体は、民族の繁栄と民族教育という課題の解決に向けて包括的に取り組み、その課題を解決することができる。われわれは倦むことなく、この課題を明瞭かつ精力的に指摘し、権力の座につく人物に対しては、その偉大なる義務を思い起こさせることを持続する。

民族の苦境は深刻である。あらゆる職種で就業生活を過ごすユダヤ人に立ち塞がるとてつもなく大きな困難、東方における大いなる災禍と大量移住による混乱、増大しつつある貧困とユダヤ人の抑圧、これらすべてが対策を求めて叫び声をあげている。しかしこの問題に関しては、いかなる慈善事業も役に立たない。根本にある悪を除去する必要がある、移住は計画を立てて実施され、新しい職業の門戸が開放され、近代的な制度や組合が組織されなければならない。つまり、大きな枠組みを備えた現実政策が無能な生ぬるい対応に取って代わらなければならないのである。

また、ユダヤ民族の文化的財産を育む必要がある。学校は、ユダヤ人子弟が自らの民族と疎遠になる施設であることをやめなくてはならない。また、ユダヤの宗教教育にも根本的な改革が必要である。ユダヤ人の若者は、ユダヤ教の偉大なる精神的財産についての知識をもたずに成長するのが常である。これでは、彼らはどこからユダヤの過去に対する尊敬を、あるいはユダヤの未来に対する信仰を獲得することができよう。どのようにして彼らは友人あるいは敵に向かって堂々とユダヤ教を擁護する術を学ぶことができようか。われわれはこのような凋落の兆候に対し、

警告の声を上げることを厭わない。

外側に向けてわれわれは、自衛というわれわれの立場に忠実に、確固とした信念をもって自立したユダヤ組織と国民的解放を目指すという考えを擁護し、われわれの民族に対するいかなる誹謗中傷を認めない。

いまや急を要する重大な時である。ユダヤ人組織の必然性は、オーストリア帝国議会選挙を目前に控えた今、二重の必然性となっている。われわれはボヘミア、オーストリアのユダヤ人の政治的成熟と見識に信頼を寄せるとともに、彼らはわれわれの声を聞き逃し、無視することはないと信じている。<sup>51</sup>

この論説からは、民族意識の覚醒とその維持による自己防衛がプラハのシオニスト学生にとっての最大の関心事であったという事実を読み取ることができるだろう。その際に、同化をユダヤ人にとっての脆さの象徴として捉えた現状に対する批判が、通奏低音として論説の全体を貫いている。彼らにとって、同化の克服は進歩主義やリベラリズム、社会主義といったヨーロッパの他民族に由来する外部のイデオロギーを通じてではなく、あくまで民族集団の内部での民族意識の追求を通じて実現されるのであると考えられている。そのための実践的な手段として、シオニズム、「宗教共同体(Kultusgemeinde)」制度の刷新、東欧における難民問題の解決、民族教育の必要性が挙げられている。「生の活力という第一の、そして最大限に信頼できる標識は、各人においても民族全体においても、自由と自立を求める努力であり、…」という箇所からは、バリッシアの『自衛』編集者がシオニズムを単なる政治運動としてではなく、各個人レベルでの民族意識を解放することが民族集団としてのユダヤ人問題の解決に通じると考えていたことの証左となりえるのではないだろうか。彼らにとって、シオニズムは単なる離散による亡命生活に終止符を打つための政治運動を指すだけでなく、民族集団に約束された救済としての離散生活の克服をも射程圏内に置いているといったら言い過ぎであろうか。少なくとも、『自衛』の創刊号を読む限りにおいて、一方的にバル・コホバは文化の復興を目指し、バリッシアは学生による民族主義政治結社であったとは結論づけられないように思われる。

『自衛』編集者はユダヤ民族の再生運動としてのシオニズムを主張する目的に並んで、この新聞をボヘミアに在住するユダヤ人に充ててユダヤ人問題を専門的に報道する専門新聞であると見なしていた。チェコ地域には『自衛』を除いてユダヤ人問題のみを専門に扱う報道機関が存在しなかったため、『自衛』は反ユダヤ主義を専門的に報道する新聞として位置づけられてもいる。<sup>52</sup> 創刊号において、編集者は報道の対象となる事柄について、前掲の論説を踏まえ、読者に向けてこのように語っている。

読者諸兄! (An unsere Leser!)

われわれは上の箇所において、われわれの新聞にとっての指針となる根本的な見解と原則について、簡潔にかつ率直に表明したが、数多くの見出し語を掲げて、厳密に包括的な詳細綱領を起

<sup>51</sup> Selbstwehr. Nr. 1. 1. Jahrgang. a. a. O., S. 1f.

<sup>52</sup> Bruce: a. a. O., S. 22.

草することは、それにしかるべき理由から見合わせた、なぜなら、党機関紙ではなく、われわれの帝国におけるユダヤ人の生活のあらゆる現象の、可能な限り忠実で客観的な鏡像たらんとするこの新聞の本質から、あまりに数多くの綱領的なことがらを掲載することによって紙面を制限、限定、拘束することは適切ではないとわれわれは判断したからである。

われわれがまず第一に、ユダヤ民族における経済的、社会的、文化的問題と課題と潮流とに特別の注意を払い、公におけるあらゆる経緯と事件を、それがユダヤ人に関する限り、さらにユダヤ系団体の生活と地方の事件を採り上げ、報道しようとしているのは自明のことである。ユダヤでないものはわれわれにとって異質である。(Nichts Jüdisches wird uns fremd sein.)

新聞の文芸欄、娯楽欄についてもわれわれは力の及ぶ限りそれらの充実にも努め、とりわけ品格のある、高貴な文体を目指している。われわれはあらゆる分野において多数の著名なユダヤ人作家の協力を仰ぐことに成功し、われわれの新聞がより広い層から同意と賛成とをえられた場合には、より短い期間に製版し、場合によっては週に一度以上の発行を目指すことも検討している。

読者諸兄、ボヘミアの全ユダヤ人諸兄には (An den Lesern, an den gesamten Judenschaft Böhmens)、この本当にユダヤの良質な新聞を支援し、購読する準備と心構えが示されることが期待されている。<sup>53</sup>

続けて、「オーストリアのユダヤ人の国民的解放のために(Zur nationalen Emanzipation der österreichischen Juden)」という見出しのもと、ニルスによる (Von Nils)署名付きの記事が続く。この記事はシオニスト機関紙としての『自衛』の位置づけを雄弁に語っている。冒頭の一部を抜粋して紹介しよう。

種子は発芽する。夢想家といわれる人が発芽を期待し、願うよりも素早く、そして幸先よく。ヘルツルの口から生への叫びがユダヤ国民にとって発せられてから、まだ10年も経過していないのに：われわれはひとつの民族である、ひとつの民族。われわれに無いものは故郷である。君たちが望めば、それはメルヘンではない。(Wir sind ein Volk, Ein Volk. Was uns fehlt, ist die Heimat. Und wenn ihr wollt, ist es kein Märchen.) 見かけは死に絶えていた生への意志が突然に根源的な力をもって覚醒した。救済の言葉(Das erlösende Wort)が語りかけられ、軀はついに破られた。かつての憧れ、かつての神はまだ生きていて、無数のユダヤの心の中で燃え上がった。そして再びいたるところにこの言葉が鳴り響いた。そうだ、われわれはひとつの民族であり、われわれには意志と道が、自由と故郷への道がある、と。ユダヤ民族の墓掘り人夫たる、程度の差こそあれ彼ら同化主義者が、この声高な叫びと覚醒を抹殺し、沈黙させようとその役回りに熱心に取り組んだが、それは徒労に終わった。いかなる沈黙も、説得も、中傷も、陰謀も、笑いも嘲りも役に立たなかった。世界はわれわれの叫びを聞いたのである。ユダヤ民族主義の存在とその存在の正当性についての認識は広まった。今や次回のロシア帝国議会において再びユダヤ民族主義代表団が生まれ、新たなオーストリア帝国議会にもユダヤ民族主義代表団が誕生することはもはや疑う余地もない。このふたつの帝国は、ユダヤ民族の圧倒的多数の居場所であるがゆえに、ユダヤ民族の承認と同権への第一歩はすでに踏み出されたのである (...) <sup>54</sup>

<sup>53</sup> Selbstwehr. Nr. 1. 1. Jahrgang. a. a. O., S. 2.

<sup>54</sup> Selbstwehr. Nr. 1. 1. Jahrgang. a. a. O., S. 2. 下線は筆者による。

下線を用いて強調した箇所「われわれはひとつの民族である…」は、ヘルツルの『ユダヤ人国家』の一節からの引用であろう。ニルススの論説は、創刊時の『自衛』がシオニズムの機関紙であることを明確に主張している。また、同化主義者を「ユダヤ民族の箱墓掘り人夫(die Totengräber des jüdischen Volkstums)」に喩えた辛辣な同化批判と、オーストリア帝国議会選挙への働きかけはバリッシアの政治的立場を代弁していよう。しかし、「救済の言葉が語りかけられ、軛はついに破られた。かつての憧れ、かつての神はまだ生きていて、無数のユダヤ人の心の中で燃え上がった。」という箇所は、プラハのシオニスト学生にとってシオニズムが政治運動以上のものを意味していることを示唆しているのではないか。それゆえに、やはりバリッシアの政治路線がバル・コホバに見られる内面の重視を拒絶しているとは言い切れないように思う。

『自衛』の創刊号には、「自衛!」の呼びかけに続いて、文芸欄 (Feuilleton)としてダヴィット・ロートブルーム (David Rothblum)による『わが母のメルヘン(Das Märchen meiner Mutter)』<sup>55</sup> が掲載されている。メルヘンの題が付されたこの物語はニルスによる前掲記事と同様に「君たちが望めばそれはメルヘンではない」というヘルツルによる国家建設の呼びかけに応じて創作された物語であることが推測される。そのために、この物語の解釈は民族の離散と再統合というシオニズムのコンテクストを踏まえて検討される必要がある。内容は、謂われのない罪のために人里離れた森を彷徨うことをよぎなくされ、表情を失った一族の末裔の中からあるひとりの男が立ち上がり、一族に向かって誇りを回復するよう訴えたという主旨である。そしてこの男の言葉は風に乗って伝えられたとあるが、風に乗って伝わったという物語の伝説化は、史実なのか伝承にすぎないのかというシオニズムの正統性をめぐる議論にも及ぶため、『わが母のメルヘン』は、単なる政治問題の物語化ではなく、ユダヤ民族にとって普遍的な現象である「離散」をテーマとした物語であると評価することができる。

本稿を通じて、シオニズムがプラハにおいて、とりわけブーバーとベルクマンの影響のもとユダヤ教の再生運動として固有の文化、精神を構築する方向へ向かっていったことが確認できた。プラハのシオニスト学生にとって文化、精神の問題に取り組むということは、ユダヤ民族に固有の現象である「離散」の問題にどう関わるかという、より普遍的な問題意識に通じていたといえよう。しかし、バル・コホバの機関新聞となった『自衛』において、実際にどのような議論が行われていたのかについては未だ未知の領域であると言わざるをえない。プラハのユダヤ人は自らを自己表象するに当たって、『自衛』にどのような痕跡を残したのか。それを辿っていくことが筆者の今後の展望であることに触れて、本稿の結びとしたい。

(北海道大学大学院博士後期課程)

<sup>55</sup> Selbstwehr. Nr. 1. 1. Jahrgang. a. a. O., S. 1ff. 『わが母のメルヘン』全訳は拙稿: ダヴィット・ロートブルーム『わが母のメルヘン』[『ブレーメン館第7号. 2009. 130-133頁.』]を参照.